

曹洞俳壇

選・坊城 俊樹

春泥を渡る遺影の母を抱き

秋田県 小田崑恭葉

評 「春泥」は春になってぬかるんできた泥のこと。作者は春が来たことの心持ちとともにその泥を渡る。そして母の美しい写真を抱きながら、供に渡っている気持ちにもなっているのかもしれない。

梅ヶ香の色ありとせば絹の艶

山口県 御江やよひ

評 「梅」という季題はその香りに焦点を当てるものだが、それを色に喩えてみたところが新鮮。しかも絹の艶のような美しい白色を持つてきた。この梅は白梅なのだろうと想像するのも楽しい。

◆食卓のさびしさに置く冬蓐

北海道 大野 節子

◆しずかなる湖に心音浮寝鳥

大阪府 数藤 茂

◆凧の寺領の樹々へ哭きにくる

島根県 藤江 堯

◆最終の列車の尾灯年惜しむ

岩手県 鈴木 道昭

◆霜焼けの指に噛みつくポストかな

静岡県 末光 愛正

◆燈台の白へ寒濤吹き上がる

神奈川県 小野沢邦彦

◆風花の遊びは鳶の輪の中に

秋田県 飯坂 信夫

◆柔らかに千手ひろげし枯椿

千葉県 鈴木 英子

◆大寒の素手へ走れる静電気

岐阜県 大下 雅子

◆大雪におぼれ給ひし野の佛

福井県 高島かづ子

*選者吟

女子高生帰るひとりの雪原を

俊 樹

*作句小見

今年の雪は凄まじいものがあつた。各地において大きな被害に遭われたことにお見舞いを申し上げたい。しかることから、その雪もまた季題なのである。雪とは怖ろしくも美しいものとして日本の美意識の中にある。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

雪山へ猪^し追ひに行く獵犬が出陣に気負ひト
ラックに待つ
鳥根県 門脇 順子

評 「雪山」「獵犬」「出陣」と言葉が緊張感を高めてゆく。
トラックの荷台に白い息を吐き、気負い立つ獵犬の姿が「待
つ」で最高のボルテージに達して描かれる力強い作品である。
結句の「待つ」が効果を挙げている。

蓮鉢の氷の破るる音したりコトンと朝刊の
入るとともに
大阪府 高畑 良圓

評 睡蓮の花を鑑賞するための鉢に寒中の今は薄氷が張り朝
刊が郵便受けに入る音に促されたかのように、その氷が割れ
たと音のみを描写。冬の早暁の引き締まった空気を伝える。

◆ 朴落葉焚火の煙匂ひ来る風は静かに土よりも立つ
山口県 中井 清子
◆ 小康を得て母正月を迎へたり今年はじめの喜びとせむ
熊本県 島田 佳可

◆ 旅客機の音近づきて去りてゆく吾の頭上を過ぎし人らよ

◆ 何となく睫^{まぶた}が濡れる雨の日は経唱えつつ野道を歩む
岐阜県 後藤 進

◆ 早春の磯の香りをまとひつつ問引かれし若布の細きを茹
であぐ
岩手県 阿部 熙子

◆ 西日受け己が影踏み雪の道確かなるもの二本のこの足
秋田県 小松 紀子

◆ べたんこになりたる小さき蚊のむくろ本の頁の隅に「水」
の字
福岡県 三吉 誠

◆ 孫描きし爺ちゃんを手をつなぐ絵はまだ祭壇に供えたる
まま
山口県 濱田 道子

◆ 老いたれば子に従えと友は言う一先ずわれは妻に従う
福島県 大槻 弘

◆ 雪残る椿の赤のうつくしさ蜜吸い散らしし飢餓の思い出
滋賀県 三田 和子

*選者詠

花芯なる黄の蕊のみのあかるさよこの世の
ものかこの黒牡丹
ちづ

*作歌小見

開いた本の「水」の字の傍に蚊の骸^{むしのかみ}があったと機知に富む
発見をした三吉さんの歌、「子に従う」前に「妻に従う」と
詠う大槻さんの歌にもウィットを感じる。心に余裕がないと
このような歌は生まれぬ。



大本山永平寺



木の芽峠拝登

皐月の永平寺は、活き活きとした新緑に包まれています。雪の降る中を入門して来た一年目の修行僧たちは、ようやく生活に慣れはじめ、山の緑と等しく清々しさを増しているようです。

永平寺をお開きになりました道元禅師さまは、建長五（一二五三）年に療養のため、京都へ向かわれます。その際、現在の福井県にある木の芽峠で、義介禅師さまに永平寺へ戻るよう告げられました。

旅の間は容態が落ち着いていたものの、しばらくして、その病は重くなり、京都でお亡くなりになりました。

永平寺では毎年、道元禅師さまの歩まれた道を辿る「木の芽峠拝登」を修行いたします。私は、修行僧たちと共に山道を歩みながら、道元禅師さまはどんな思いで永平寺を後にされたのだろうか、どんな思いで義介禅師さまとお別れしたのだろうかとお偲びしたものです。

その木の芽峠にはこんな御詠が残されています。

「草の葉に首途かどせる身の木の目山空に路ある、心地こそすれ」
私たちが生きている、この「一日」は、もう二度と帰ってこない有難い一日です。まさに毎日が「かどで」であります。出会いも別れも抱きしめて、まごころを忘れずに生活したいものであります。

南無高祖承陽大師道元禅師



大本山總持寺



禅師さまよりしゅっぺい竹篋を預かる首座

夏安居げあんご

ただいま總持寺本山僧堂は、夏安居という修行の集中期間に入っております。修行の集中期間は夏安居と冬安居とうあんごの年二回行じられ、ともに一〇〇日間にわたって続きます。

安居はお釈迦さまの時代に起源を発する行事で、もともと「雨期」を意味しました。インドでは雨期になりますと托鉢などで心ならずも小さい虫などを踏み殺すおそれがあるため、外出を控え一カ所（寺院などの精舎）に留まって坐禅修行に集中しました。これが後に中国から日本へと相承され、現在では安居と称して修行道場で行じられています。

夏安居は四月から七月半ばにわたって続けられます。その中間にあたる五月十三日から十七日にかけて、「制中五則せいちゆうごそく」という大切な行持が行われます。

制中五則は曹洞宗の歴史と伝統を受け継ぐものであり、そのクライマックスが「首座しゅぞ法戦式ほっせんしき」です。「首座」という全修行僧の先頭に立つ僧が禅師さまの命を受けて、大勢の修行僧と禅問答を交わします。

法戦式では、首座は自らの持てる力量をすべて出し切り、他の修行僧との緊張感が漲る真剣勝負が繰り広げられるのです。